連載 ビブリオ・トーク －私のオススメ－ Jr.

…▸ 伊藤将志（㈱ 東芝）

目の見えない人は世界をどう見ているのか

伊藤亜紗 著
光文社（2015），836 円（税込），216p., ISBN：978-4-334-03854-0

この本に出会ったきっかけ

ここ数年でコラボレーションツールが広く使われるようになり，多様な人の考えや，取り組みを近くに感じられるようになった．そのような環境の助けもあるのか，ここ数年，私の周りのダイバーシティ＆インクルージョンに対する取り組みが具体化し，私もそれに触れている感覚を持っている．その感触から必然的に私自身も興味を持ち，その概念を形成しようと試みている最中である．そのような話を知人にしたところ，面白いから読んでみろ，とこの本を紹介された．

この本では視覚障害者を「世界の別の顔」を感知できるスペシャリストとして捉え，彼らとの対話などから，その世界を垣間見ようとしている．本書に出会うことで，私は見える世界を広げる手がかりを得たように思う．このビブリオ・トークによって，その感動を共有できれば幸いである．

変身のハウツー本

この本では，「目の見えない人が見ている世界」を見ようとする．この本はこれを「変身する」と表現している．この「変身」こそが真の目的である．変身は目を閉じて歩いてみたり，その人の気持ちになったりする作業ではなく，たぶん読者の経験にない作業になる．これもこの本の表現だが 4 本脚の椅子を 3 本脚にするのではなく，元々 3 本脚で成り立つ椅子になる必要がある．普段の自分から引き算することは変身にはならない．

この本はさらに「普段使っている体をぐにゃぐにゃに溶かすような体験をする」と表現している．読者は普段の体では得られない感覚を得るために，今の体を溶かすことを求められる．それは普通ならきわめて難しい作業になる．そこで，この本はそのナビゲータを務めてくれる．「ここはこう溶かしましょう」と教えてくれて，その通りにしたら次は溶けた体を入れる型を準備してくれている．型は視覚障害者へのインタビューとこの本の著者の考察により作られている．著者は，聞いた範囲での経験を中心に構成したもので一般論ではない，というが著者の考察を通った型は，非常に洗練されているように感じる．その型も，空間，感覚，運動，言葉，ユーモア，というタイトルで揃えられ，まるで変身セットを渡された感覚になる．

体をぐにゃぐにゃに溶かす

とはいえ，体を溶かすのは難しい．初めは「溶けてください」という，経験のない指示に圧倒されてたじろいでしまう．考えてみると，目標の姿は読者共通であるが，溶かす体は読者それぞれなので，体を溶かせるかどうかは読者自身の熱や原形に依存するはずである．変身への期待を燃料にして体を温めて，自分自身の原形の認識をぐにゃぐにゃにする．そうやって，読者は一生懸命溶けてみる．いろいろな例を与えられて，溶けたと思うときもあるし，元の自分から引き算した姿を想像しているだけで結局溶けてないじゃん，と思うときもある．

視覚障害者の美術鑑賞の方法を取り上げた例があった．私の場合，この例では上手く溶けて変身で

きた気分になれた．私自身の話で恐縮であるが，私は美術鑑賞が得意ではない．視覚的には見えるが，作品の美しさの感じ方が分からず，見えている感覚にならない．視覚的と気持ち的な違いはあるが，見えないという共通点があるともいえる．上手く溶けたというより，原形が近いことで溶ける必要量が少なかったのかもしれない．

美術鑑賞の例では，見える人が作品を「言葉」で表現することで，気づきやそれに伴う気持ちを，見えない人と共有する方法が紹介されていた．私も作品の前で「これは何だろう？」とか「よく見たら違った」とか思うことは多いが，それが他人の言葉で聞けるなら，衝撃的な面白さがあるかもしれない．この方法なら私も作品が見える．

上手く溶けられずにモヤモヤした例もいくつかあった．しかし，完璧に溶けなくても，難しいと感じるだけでも価値があったと考えている．この本の著者は「まずは想像力を働かせてみたい」と言う．

創造について考える

この本で得た変身のコツを応用して，多様な体に変身できたら便利に違いない．たくさんの視点から幅広いアイディアの量産ができる気がする．できたらいいが，そこまで変身するには並外れた修行と情報を要すると確信できる．しかし，難しさを知ることで，違う世界を見る人との共創がどれほど難しい作業を代替してくれるか，その価値を改めて感じられた．

もちろん共創が簡単と言いたいわけではない．共創するには違う世界を繋げる必要がある．変身を試みる姿勢や経験は，2つの世界を繋げる接点になるように思う．世界が違うのだから，接点は疎通を快適にするため重要である．

この本から得た知識であるが，ゾウとアリの時間の感じ方はまったく違うらしい．この話を使って例えると，ゾウの上司がいるとして「軽く3分雑談いい？」と部下のアリに言えば，アリは「軽くないよ，急だな」と思うかもしれない．アリとゾウに聞こえる「3分」は意味が異なる．そこで，仮にゾウ部長が変身を試み，アリの世界を垣間見れば，「相談があるんだ，3分ほしい」と台詞を変え，2人に聞こえる言葉の意味は近づく．つまり，「3分」という言葉の接点が噛み合い，疎通を快適にする．

この本ではインクルーシブデザインという言葉も紹介されている．これまで創造の参加者ではなかった多様な人たちを取り入れて新しい創造に挑む．そういう取り組みがどんどん取り入れられていくとして，変身の体験とその難しさの認知は重要になるように思う．

過程を楽しむ

この本で紹介された美術鑑賞の例でも，過程を伝えて面白さを共有することを目的としていた．これをこの本自身に当てはめるなら，変身する過程を伝えてその面白さを共有しているといえる．変身できたり，できずにモヤモヤしたりするのも楽しい．変身の難しさを知ることも，見える世界が違う人とともに創造することについて考えさせてくれる．

そして，ここまで読者を導いたのは，この本の変身に対する想いであった．私だけでは変身という概念さえ発生しない．つまり，この本に出会うこと自体も，異なる世界と繋がる経験であったように思う．読書を通した変身への挑戦は，衝撃的といえるほど面白く新鮮な体験だった．変身に興味を持ってこの本を手に取ったら，ぜひ変身したりモヤモヤしたりして，その過程を楽しんでほしい．

（2021年9月27日受付）

伊藤将志（正会員）
masashi8.ito@toshiba.co.jp
2009年より東芝研究開発センターにて情報通信プラットフォームの研究に従事．博士（工学）．